

温故知新で 作り出す 次世代の 雑賀崎

池田さんがうみまちづくりにおいて大切にしていることが、「雑賀崎をリスペクトすること」。雑賀崎には「うみまち」としての産業や景観の他にも、独特な雑賀崎弁や昔から続くお祭りなどが、まちの文化としてあり続けています。伝統ある文化を大切にしつつ、まちに自らが入り込むことで新たな取り組みのきっかけが生まれるのです。

池田さんが新たに構想しているのが、まちの空き家を活用して漁家民泊の2棟目を作ること。今よりさらに多くの方に利用いただくことを目指すとともに、元タイタリアから事業のヒントを得たこともあり、海外各国の漁師が集まってそれぞれの国の漁師の知恵や技を共有できるコミュニティの場づくりにも将来的には取り組みたいと考えています。

雑賀崎を100年先もつづく漁師まちにすべく、まちに根差した「うみまちづくり」が若い移住者夫婦から生まれ、今も進化し続けています。



Fisherman's Table&Stay 新七屋 池田佳祐さん

雑賀崎出身。代々漁師を営む家系に生まれ、磯遊びと海の幸で育つ。愛知県の大学で外国語・マーケティングを学び、イギリス、フランスに留学。大学卒業後、東京・大阪に在任し医療系ベンチャーの営業として全国を駆け回る。両親を説得し、2020年から漁師として父親と健勝丸に乗る。2021年に海辺暮らしが体験できる宿「Fisherman's Table&Stay 新七屋」を開業。2024年に妻の美紀さんと「うみまち食堂 うらら」を開業。

編集メンバーおすすめの一冊



うみのハナ

すけのあずさ / 作 BL 出版

雑賀崎を舞台にした絵本です。雑賀崎では春と秋のお彼岸の時期に海を眺める風習があり、夕日からキラキラと花が降ってくるように見えることから、その風習は「ハナフリ」と呼ばれています。雑賀崎の漁港前にかつてあった理髪店を舞台に描かれた本作では、「ハナフリ」にまつわる温かな物語が、和歌山県在住の作者により描かれています。大人でも楽しむことができる絵本です。

編集後記

今回は和歌山市の景勝地・雑賀崎で、独自の方法で新たなまちづくりに取り組む池田佳祐さん取材しました。雑賀崎の話題を耳にすることはあっても、実際にまちに足を運ぶ機会は少ない方が多いのではないでしょうか。私たち編集メンバーも取材で初めて雑賀崎のまちの中にお邪魔しました。細い路地の両脇にレトロなまち並みが広がる中で、まちの人たちが何気ない日常会話を繰り広げる。そんな風景を目にし、和歌山市にこのような古き良きまち並みが残っていたのか...と感動を覚えました。ところで取材の際に、池田さんは図書館で本との出会いが今の活動のきっかけになっていると話されており、図書館で働く者として大変うれしく感じました。「本との出会いが人生を変える」と言われることもあります。まさにその通り。和 the を読んでいただいている皆さまにも、かけがえのない1冊との出会いがありますように。

和歌山市民図書館 WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

〒640-8202 和歌山県和歌山市屏風丁17番地

TEL : 073-432-0010

開館時間：9:00～21:00

図書館の詳しい情報はこちらから

和 the バックナンバーは、図書館 HP よりご覧いただけます



ホームページ



Instagram



facebook



15

2024.7.1 発行
TAKE FREE



うみまちの うみ

雑賀崎を
100年先まで

取材協力: Fisherman's Table&Stay 新七屋 池田佳祐さん

和歌山市民図書館
WAKAYAMA CIVIC LIBRARY

100年先
も続く

うみまち

をつくる



万葉集に歌われるほど歴史の深い景勝地・雑賀崎。斜面に建物が密集し、その様はイタリアのアマルフィ海岸に例えられるほど美しい景観ですが、古くから漁村として発展してきたまちでもあります。今回の和 the では、そんな雑賀崎で漁家民泊や食堂を営む池田佳祐さんを取材しました。漁師の家系で育った池田さんは、一度は雑賀崎を離れるも、あるきっかけから故郷へ戻り漁師に。その傍ら、市内でもめずらしい「漁家民泊」を開業。さらにまちのコミュニティの場として食堂も開くなど、様々な「うみまちづくり」に取り組んでいます。池田さんはなぜ雑賀崎にUターンし、漁師をしながら事業展開しているのか。うみまちづくりのワザに迫ります。



“うみまち”の景観

斜面に建物が密集した独特な景観が特徴の雑賀崎。そのような景観になった要因は諸説ありますが、大切な漁船を家から見守るためとも言われています。まちの中には細い路地が迷路のように通っており、現在では観光名所として人々の注目を集めています。



“うみまち”の商い

雑賀崎は古くから漁業で栄えたまちで、その歴史は室町時代まで遡るとも言われています。現在は主に底引き網漁が行われ、鯛や足赤えびなど、様々な魚介類が水揚げされることも特徴です。漁船の帰港後に船上で行われる「鮮魚の直接販売」には県外からも多くの人が集まっています。



“うみまち”の文化

雑賀崎には昔からの文化を大切にしたいという想いが根付いています。その1つが旧正月を祝う風習です。雑賀崎では漁業において潮の満ち引きの影響を受けるため、月の満ち欠けに基づく旧暦を重んじています。新しい年を祝うために色とりどりの大漁旗を揚げた漁船が並ぶ風景が、冬の風物詩となっています。

海とともに在るうみまち 雑賀崎

まちを離れて感じた2つの気付き

◆ 外から見たまちの変化 ◆

大学進学を機に雑賀崎を離れた池田さん。帰省した際、漁師まちとしての賑わいが薄れ、幼い頃とは異なるまちの姿を目の当たりにしました。そんな中、父から「お前はもう陸に上がったんやから海のことは気にせんでええ」と言われ、この言葉が池田さんの大きな転機となります。小さい頃から海と近い生活をしてきた池田さんにとって、海やこのまちから離れてしまったという疎外感を感じた一方で、まちのこれからは思うと強い危機感を覚え、ここで大きなターニングポイントを迎えました。

◆ まちの知らなかった姿を知る ◆

昔と比べ収入が安定せず、危険な仕事でもあるため、両親は漁業を継ぐことに反対でした。しかし代々続いてきた家業を終わらせてもいいのかと池田さんは考え始めます。まずは自分のルーツを知るために祖父母に昔の話をヒアリング。漁師という仕事や昔のまちの様子を知り、途絶えさせたくないという思いが強まります。さらに大学時代に出会った教員の影響から、「知らないことを知ること」の楽しさに気付き、知識を得ることに対し貪欲になった池田さん。自分の中にある疑問に対するヒントを探すため、まずは図書館で水産や漁業の本を読み漁り徹底的に調べました。雑賀崎の歴史を知れば知るほど興味がわき、気づけば「どうすれば雑賀崎で漁師まちとしての賑わいをつくることができるか」と考えていました。そして池田さんは雑賀崎に漁師として戻ることを決めたのです。

まちに戻ってきて実行した2つの取り組み

◆ 漁家民泊 海辺の生活を体験できる宿づくり ◆

雑賀崎に戻り、漁師として暮らすことを決めた池田さん。本業以外で生活を成り立たせ、漁師まちとしての賑わいを取り戻す方法を模索する中、イタリアで盛んな漁業と観光を組み合わせた「ベスカ・ツーリズム」の存在を知りました。実際にイタリアまで足を運び、体験した池田さんは、雑賀崎でも実現できると確信。こうして、漁業体験など海辺の生活を体験できる宿・漁家民泊の開業に至りました。築60年の古民家をリノベーションした「新七屋」では、磯遊びや海水浴ツアー、海辺のピクニックなど様々な体験ツアーを宿泊者へ提供。家族連れから大人、最近では海外からも幅広く利用いただいているそうです。

◆ 食堂 まちのコミュニケーションの場づくり ◆

池田さんと共に雑賀崎に移住した妻の美紀さんも新たな取り組みを始めています。美紀さんは、まちで暮らす中で、1人で住むご高齢の方や買い物に困る人など、雑賀崎で暮らすリアルな人々の姿を見ました。そこで、このまちの人のために何かしたいと思い、気軽に立ち寄ることのできる居場所を作り、雑賀崎の海の幸を堪能できる場所として、「うみまち食堂うらら」を2023年3月にプレオープン。2024年4月からは本格的な鮎を味わうことのできるお店として営んでいます。昼夜ともに店内は地元住民や観光客で賑わい、雑賀崎に集う人々に愛される新たなコミュニケーションの場として歩み始めています。